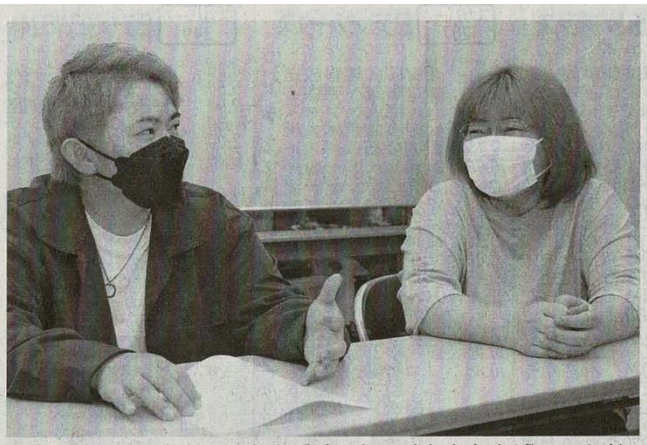
2022年6月22日（水）読売新聞

自分らしい性で生きる

虹に向かって 中

社会生活に壁も

「性別を女性から男性に変えたい」――。青森市の会社員、大澗倫也さん(26)は2年前、両親と兄弟に切り出した。大澗さんは戸籍上は女性だが、自分は男性だと自認するトランスジェンダーだ。あるアイドルがトランスジェンダーだと公表したのを見て、「隠さずに生きていいんだ」と気づき、告白を決めた。



「男性として生きることを受け入れてくれたおかげで、心が軽くなった」と母親の明美さん（右）に話す大澗倫也さん

幼い時からスカートを嫌う姿を見ていた母親の明美さん(52)は「薄々気づいていたし、自分らしく生きられるならそれでいいと思って『ああ、そうなの』と受け入れた」と振り返る。

だが、社会は違った。採用試験を受けようと青森市の企業に電話し、トランスジェンダーだと告げると「性的少数者（LGBTQ）は受け入れていない」と、面接すら断られた。「性別で人を見るのではなく、一人の人間として見てほしい」。大澗さんは訴える。

■特有の生きづらさ

電通ダイバーシティ・ラボ（東京）が2020年、全国の20～59歳の6万人に行った調査で、自分はトランスジェンダーだと答えた人は0・64％。社会には一定数のトランスジェンダーがいるが、「男」「女」と二分化されている社会で、両方を体と心に持つトランスジェンダーならではの生きづらさが存在している。

だが、「トランスジェンダー」という言葉と意味を知っている人は63・8％。「ゲイ」の96・4％、「レズビアン」の96・7％より大幅に低く、理解が進んでいないことがうかがえる。

戸籍上の性別の変更は、04年に施行された性同一性障害特例法で可能になった。だが、卵巣や精巣の摘出手術などが必要で、経済面でも身体面でも負担が大きい。

手術をしてまで戸籍上の性別を変更したいと思わない人もいる。五所川原市のシンガー・ソングライター、前田晃貴さん(30)は、戸籍上は男性だが、自分は女性だと自認するトランスジェンダー。「手術をしなくても自分らしく生きられますから」ときっぱりと話す。

このため、戸籍上の性別変更を家裁に申し立てて認められた件数は、20年度に全国で676件で、県内は2件にとどまっている。

中塚幹也・岡山大教授（生殖医学）は「自認している性に合った制服やトイレを使えないなど、トランスジェンダーならではの悩みがある。自治体は、理解を深めるための市民講座を開いたり、教育現場でLGBTQについて考える機会を設けるように働きかけたりすることが望ましい」と指摘する。

◇

「下」は24日に掲載予定です。